

氏名	木村 幹
学位(専攻分野)	博士(法学)
学位記番号	論法博第134号
学位授与の日付	平成13年11月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	朝鮮／韓国ナショナリズムと「小国」意識 ——朝貢国から国民国家へ——

論文調査委員 (主査) 教授 木村 雅 昭 教授 大 嶽 秀 夫 教授 伊 藤 之 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、朝鮮／韓国ナショナリズムの特質を比較史的観点にたつて明らかにしようとするものである。

序章において著者は、あるネーションにおいてナショナリズムが形成されるまでには、次の三つの過程が存在する、と述べる。即ち、第一の過程は、ナショナリズムの保有者としての、文化的な同質性を有する「集団」が形成される過程である。前近代と、ナショナリズムの時代である近代とを分つ最大の特徴の一つは、前近代の社会が有文字階層と、土着的な無文字階層との二つの階層から構成されるのに対し、近代社会が、近隣のそれから区別可能な、文化的等質性を有するネーションから構成されることである。言うまでもなく、ナショナリズムが形成されるには、先ず以てこのような「集団」が形成される必要があり、これが第一の過程とされる。しかしながら「想像の共同体」であるネーションの成立には、更に文化的等質性を有する「集団」の成員達が、自分達が同じネーションの構成員であることを「認識」することが必要であり、著者はこれをナショナリズムの第二の過程とする。第三に、ナショナリズムの成立には、各々のネーションが、自らに固有なナショナリズムの「論理」を獲得する過程が存在し、著者はこれを、ナショナリズムの第三の過程であると述べる。著者によれば、ネーションが各々に固有の「論理」を獲得するに至る最大の原因は、これらのネーションが、「近代化」という課題を目前にして、各々異なる「環境」を与えられていることであり、このようなナショナリズム固有の「論理」と、その背景となる「環境」を理解することなしに、各々のナショナリズムを理解することは困難である、とされる。

以上のような理論的視点を前提として、第一部の各章は、朝鮮／韓国ナショナリズム形成に際しての、将来のネーションたるべき「集団」が形成される過程と、その「集団」が自らがネーションであるという「認識」を獲得する過程を分析している。即ち、国際的「環境」の面から「集団」の形成過程を扱った第一章、同じ問題について国内的「環境」から分析を行う第二章、「認識」の獲得過程について分析する第三章、がそれである。

第一章において著者が扱うのは、前近代において東アジアの国際秩序を規定してきた「朝貢体制」についてである。著者によれば「朝貢体制」とは、古代中国から中華帝国を規定してきた二つの思想的潮流、即ち、法家と儒家が自らの根本的原理とする、「法治の論理」と「徳治の論理」とを、巧みに組み合わせることによりできあがったものである。即ち、全世界を支配することを自らの存在の大前提とする中華帝国は、自らの軍事的・行政的支配の及ぶ範囲においては「法治」を行うと同時に、現実に支配の及ぶことのない、帝国の外延部においては、それを「徳治」により統治するものと規定することにより、自らが自らに課した「世界帝国」としてのイデオロギーと現実とを巧みに調整することに成功してきた。著者によれば、このように中華帝国が、自らの「法治」の領域と「徳治」の領域とを区別したことこそが、「法治」の領域の外にある朝貢国の住民を、中華帝国のそれと明確に分けへだつ上で決定的な役割を果たしたものであり、これこそが、高度な文化的等質性を持った朝鮮／韓国という「集団」を作り上げたのだ、とされる。

第二章においては、朝鮮半島内部の社会の変化に注目する。朝鮮王朝後期における在地両班層の経済的凋落は、在地社会において「権威」を有する在地両班と、「富」を有する良人地主層という、二階層の分離を齎し、これが朝鮮半島在地社会の凝集力を著しく損なうこととなった。この点に注目する著者は、この凝集力を欠如した朝鮮半島在地社会の特質こそが、

今日の朝鮮／韓国社会を特徴付ける、高度な流動性を可能にしているのであり、また、この高度な流動性こそが、朝鮮／韓国ネーションの一層の等質化を齎していることを指摘する。第三章においては、このようにして成立した高度に文化的等質性を有する朝鮮半島の「集団」が、自らのネーションとしての「認識」を獲得してゆく過程が論じられる。ここで著者が重視するのが、第一に儒教が本来的に有する「社稷の論理」、即ち、王朝支配下の地域の農産物の収穫は、王朝が祭る「社稷」あつてのものであり、それ故、この農産物を食する者は、均しく王朝からの恩恵を受けるものなのだ、とする論理が、朝鮮半島の「臣民」にその一体感を持つことを可能としたこと、そして、それが単なる「臣民」からネーションへと成長するに当たっては、「臣民」の主人であるべき「王」が日本に屈服したことが決定的な影響を及ぼしていたことである。著者によれば、こうした状況が満たされて始めて朝鮮／韓国ネーションは成立したというべきであり、それには三一運動を待たなければならなかった。

以上のような過程を経て成立するネーションが、自らが何者であるかを説明する「論理」を獲得してゆく過程を明らかにするのが、第二部である。第二部の各章において強調されるのは、朝鮮／韓国を巡る国際的・国内的「環境」が、朝鮮／韓国人に繰り返し、「自らは小国であり、それゆえに無力である」という前近代から受け継がれた「小国意識」を再確認することを余儀なくさせたこと、そして、今日見られるような韓国ナショナリズムの「論理」は、この「小国意識」との葛藤の中から、それを克服する形で生まれてきた、ということである。

著者はまず、開国期を扱った第四章で、当時の朝鮮王朝における代表的開国論者の中から、文官の朴珪寿と、武官の申櫛の開国論とを比較検討することにより、この時期の朝鮮王朝知識人達が、「近代」を迎える以前から、日本とは対照的な、独特の「小国意識」を抱いていたこと、そして、それが朝鮮王朝の「近代」への対応を、日本のそれとは大きく変えていったことを明らかにしている。即ち、朝鮮王朝の知識人は、西洋の脅威を目のあたりにして、朝鮮王朝は「小国」であり、実力で列強に対抗することが困難であることを前提としてその開国論を展開しており、ここでは日本において見られたような、開国論から開化論への直線的展開が困難であったことが指摘されている。

これを受けた第五章では、一九世紀末の穏健開化派の指導者、金允植の思想について分析することにより、この時期朝鮮王朝に突きつけられた「近代化」の課題を前にして、当時の朝鮮王朝知識人達が、繰り返し、資源動員能力を著しく欠如した、「ソフトな」朝鮮王朝国家の現実に直面せざるを得なかったこと、そして、そのような過酷な「環境」が、彼等の「近代化」への情熱を次第に奪い去り、それこそが韓国の植民地化へと繋がっていったことが明らかにされる。

同じことは、韓国併合期の韓国首相、李完用を扱った第六章においても確認される。韓国併合の悲劇の背景にも、日本側の意図を離れて、李完用の「小国意識」に由来する、大韓帝国国家の力への無力感と、それを前提とした、東アジア的「国家」維持の為の試行錯誤があったのである。即ち、大韓帝国の無力さを前提とした李完用が展開したのは、日本への際限なき譲歩戦略であり、譲歩に譲歩を繰り返した結果、彼は守るべき「国」を失うこととなったことが指摘される。

李光洙と朱耀翰という、三一運動当時、朝鮮／韓国民族運動のスポークスマンの役割を担い、三〇年代以降においては典型的な「親日派」へと転落してゆくこととなった二人の人物を扱った第七章においては、独立運動家達もまた、このような「小国意識」の呪縛の埒外でなかったことが確認される。著者によれば、独立運動においても、一九二〇年以降、運動の為の財政的基盤と国際的支援を欠いた朝鮮／韓国民族運動家達が辿り着いたのが、やはり、自らのネーションに対する無力感であり、これこそが一部の運動家達をして運動からの脱落を齎していったことが明らかにされる。また、日本統治時代の所謂「親日派」問題も、このような民族運動の挫折の延長線上で理解されるべきこと、自らをネーションへと高めんとする試みの挫折こそが、彼等をして八紘一宇的な「普遍的日本」へといざなっていったことが強調される。

最後に、大韓民国初代大統領、李承晩を扱った第八章において、このような朝鮮／韓国ナショナリズムと「小国意識」との葛藤が、李承晩に典型的に見られたような、朝鮮／韓国は小国であり、無力であるからこそ、自らの正当な権利を大國に対して要求する当然の権利を有しているのだという韓国ナショナリズム固有の「論理」が獲得されることにより、収束し、安定していったことが明らかにされる。著者によれば、このような大國からの支援正当化を内在する韓国ナショナリズムの論理こそが、一九六〇年代以降の官民双方の「外資」に依存した韓国経済の発展を、その「強い」ナショナリズムと同居させることを可能とさせたのであり、今日においても、この点を理解することなしに、韓国ナショナリズムを理解することが困難であることが強調され、ここにおいても朝鮮／韓国ネーションの歴史的背景が引き続き大きな影響を与えていたと結論

づけている。

論文審査の結果の要旨

本論文の特徴は、膨大な一次資料の詳細な検討を踏まえつつ、ナショナリズムに対する一貫した理論的視点から、朝鮮／韓国ナショナリズムを分析していることにある。これまで朝鮮・韓国は、わが国と密接な関係を持っていたことから、頻繁にマスコミでも取り上げられてきたものの、近・現代の政治現象についての研究は今日に至るまで驚くほど少なく、とくに朝鮮／韓国ナショナリズムに対する政治学的な研究は皆無であり、この意味でも本研究の価値には極めて大きなものがある。

それに加えて本論文はナショナリズムの特質を、国家の体質との関連のもとに捉えようとした点ですぐれて独創的な視点を含むものである。とくに東アジアの朝貢システムとそこに組み込まれた朝鮮・韓国の国家的体質とが、それ以後の朝鮮・韓国の近・現代史に決定的な影響を与えているとの観点から朝鮮／韓国ナショナリズムを分析せんとする著者の手法は、斬新なものであり、そのことが本研究にありきたりのナショナリズム研究には見られない深さを与えている。この意味で本研究はナショナリズム研究であると同時に国家に関する極めて刺激的な研究でもあり、さらにそれを通して東アジアの国際秩序の本質に迫ろうとする野心的な研究でもある。とくに朝貢システムに組み込まれた朝鮮・韓国と、それに組み込まれなかった日本とが、まさにそれゆえに近代において質的に異なる発展をとげたという視点は、本論文を貫く一貫したモチーフをなしている。すなわち日本が朝貢システムの外に位置していたゆえに西欧列強の脅威を深刻に受け止め、そこから近代国家の建設に邁進していったのに対して、朝貢システムに組み込まれていた朝鮮・韓国が主権国家が相對峙する近代の国際システムの在り方に対して鈍感で、中国に代わる新たな宗主国のもとで生存の道を探らんとし、遂には日韓併合へと至りつかざるを得なかったとする見解は示唆的なものである。またそれは従来ともすれば一国単位で考察せんとしてきたのに対して、近代における国家の歩みを国際システムの在り方との関わりのもとに捉えようとする点で、比較政治学の分野に新たな手法を取り入れようとするものである。

その一方で、朝鮮・韓国の政治社会を政治社会学的に分析し、在京両班と在地両班とを結び付ける絆が、近世末期に切断され、その結果、社会に対する国家の統制力が弱体化し、結局のところ近代化に挫折することとなったとする見解も説得的なものである。それは家産制的統治構造の特質を朝鮮・韓国の具体的な政治社会状況に基づいて解明せんとする点で、朝鮮・韓国の近代史を構造的に明らかにすると同時に、比較国制史研究に貴重な知見を付け加えるものである。また両国の国家歳入を前近代から近代にかけて比較した著者の分析は、以上のような構造史的分析を具体的な数字によって補強するものであり、著者の見解を説得的なものへと仕立て上げている。しかも同じ体質が朴政権以後も持続したと捉える著者の見解は、従来「強い国家」の典型と捉えられてきた朝鮮・韓国の国家的体質に再考を迫るものであり、さらに韓国の経済発展を「強い国家」を前提とした動員体制に求めようとする通説的見解に代えて新たな視座を提供するものである。なかんずく著者の分析は、国家主導型の動員体制こそが後発国の近代化に有効な戦略とみなす近代化理論一般を根本から問い直そうとする点で、理論的含意に富むものである。

もっとも著者の分析に問題がないわけではない。李完用はともかくとして、李光洙と朱耀翰がナショナリズムを放棄し、親日家へと転換していった背景を、もっぱら自国の小国性に対する彼らの認識から説き明かそうとする著者の立場は、植民地ナショナリズム一般が、宗主国への協力と反発とを織り交ぜた複雑な軌跡を描くことを考慮すれば、現実の歴史過程をいささか単純化するものである。しかしこうした著者の立場は、朝鮮／韓国ナショナリズムを、国家的体質を踏まえて、可能な限り体系的に理解しようとする著者の意図に発するものであり、そのことによって本論文の価値がいささかでも減ずるものではない。また朝鮮・韓国における国民形成の前段階として、社稷の概念に注目し、王朝支配下の農産物は王朝が祭る社稷の賜物であるとして、そこに王朝に対する忠誠と、農産物を産する土地に対する愛着が生み出されてくる思想的背景を見て取る著者の分析は、近代化の過程でしばしばなされる伝統思想の創造的読み替えの一例として、きわめて興味深いものである。

いずれにせよ本研究は、従来ともすれば表面的な政治現象にふりまわされて不毛な対立に彩られてきた、わが国の朝鮮・韓国研究を、本格的な学問的議論の枠組の中に捉えようとするものであり、その意味で従来の研究の隘路に突破口を拓くものである。またナショナリズムそのものに対する豊かな知識、さらに様々な国制に関する該博な知識に裏づけられている点

で本研究は、たんに朝鮮・韓国に関する個別研究にとどまらず、比較政治学に対する貴重な貢献と評価されるべきものである。

以上の点に鑑み、本論文の学問的価値には極めて大きなものがあり博士（法学）の学位を付与するにふさわしいものである。なお平成13年10月16日に調査委員三名が論文内容と、それに関連する試問を行なった結果合格と認めた。